

取引先つながり強み

住宅設備資材の販売、タイル工事、リフォーム事業などを手がけるタケセン（宮崎市）。創業者は現社長の日高彰一（51）の曾祖父・千一。1923（大正12）年、土壁の下地になる竹材「えつり竹」など左官材料の販売を現在の宮崎市松橋町（宮崎市役所第5駐車場辺り）で始めた。

「それ以前は竹細工を扱っていたようだ。住宅の竹需要が伸びると見込んだのだろう」と彰一。竹材専門だったので、取引先からは親しみを込めて「竹や」と呼ばれた。

後の59（昭和34）年に法人化し有限会社「日高建材店」となったが、わずか7カ月後に「竹専建材店」に商号変更しているのも、その事業がしつかと地域に浸透していた裏返しといえる。彰一の母で前社長の和子（80）＝現会長＝は「タケセン、タケセンとかわいがつても

顧客目線 リフォームに力

らってきただけが100年続く力になった」。92年には片仮名の現社名となる。

タケセンの歩みは、窮地に創業家の女性たちが奮闘し、信頼をつないだ歴史でもある。千一を継いだ長男の平八（千一に改名）は沖縄で戦死。終戦時に23歳だった妻美佐子が幼い一人息子・常一を抱え、初代千一の妻ユキと家業を切り盛りする。戦後復興の波に乗り、左官材料は飛ぶように売れた。壁材ののり、補強するすき、色粉などの仕入れに、遠くは北海道まで赴くなど精力的に動いた。

事業を飛躍させた美佐子は59年の法人化をかなえ、初代社長に就く。主力商材は浴室や台所など水回りで多用されるタイルへと変遷。今に続く住宅設備メーカーLIXIL（リクシル、当時は伊奈製陶）との取引も戦後間もなく始まったが、地方の若い女性が食



現在の宮崎市松橋町にあった1960（昭和35）年ごろの竹専建材店＝タケセン提供

い込むのは異例のこと。直談判して1年間現金取引を続け、信用を勝ち得た粘り腰があればこそだった。

2代目社長は74（昭和49）年に30歳で就任した常一。この年に宮崎市役所周辺の道路拡張に伴い、本社社屋と倉庫を現在地の同市霧島に新築移転。地方の建材店では珍しかった住宅設備機器やタイル、衛生陶器などを常設展示するショールームも開設した。

「お客さまに満足していただくには業者主導ではなく、実物をじかに比較して選んでいただくことが大事」とユザー本位を貫く常一の信念を形にした。タイル工事部門の売り上げを伸ばし、大手ゼネコンなどとの取引も拡大した。

しかし97年10月に53歳で急逝。事務をしていた妻の和子がその遺志を継ぐことになる。会長で義母の美佐子にハッパをかけられ、工事、販売合わせ千を超える取引先をあいつつ回り、快適な暮らしづくりに貢献していきたい」と話している。和子は「すぐに覚る。」（諫山尚人）

1923(大正12)年	初代・日高千一が土壁の下地になる竹材「えつり竹」など左官材料の販売を現在の宮崎市松橋町で始める
終戦後	2代目千一の戦死を受け、妻美佐子が家業を担う
59(昭和34)年	1月に法人化し「有限会社日高建材店」に改称、美佐子が初代社長に就く。8月には「竹専建材店」に商号変更
74(昭和49)年	美佐子の長男・常一が2代目社長となる。本社社屋と倉庫を宮崎市霧島に移転し、住宅設備機器やタイル、衛生陶器などのショールームもオープンさせる。76年に株式会社化
92年	本社社屋建て替えに併せ「タケセン」に社名を変更
97年	常一が急逝、妻の和子が3代目社長に就く
2014年	常一と和子の長男・彰一が4代目社長に就く



タケセンの社員たち。前列左から5人目が社長の日高彰一、その右隣が会長の和子＝宮崎市・宮崎神宮（米丸悟撮影）